(東女医大誌　第46巻　第3号
頁　272～275　昭和51年3月)

〔学　　会〕

東京女子医科大学外科系合同カンファレンス

日　時：昭和50年11月14日午後5時半より
場　所：消化器病センター・カンファレンスルーム
当番幹事，東　間　　紘（腎センター）

1．進行性頭蓋骨折

（脳神経外科）

○杉浦　　誠・谷川　達也・河野　　宏
神保　　実・喜多村孝一

小児における頭蓋骨線状骨折は，頭蓋および，脳の発育に由来する解剖学的，生理学的特質のために，進行性頭蓋骨折と呼ばれる病態をとる例がある．これは，骨折により，骨に密着している硬膜が破損し，クモ膜嚢腫等が起ることによつて，脳の拍動が骨に伝達されるため，骨面の erosion，過骨形成，骨折線の拡大が生じ，ついには，骨欠損，拍動性腫瘤を生ずる病態である．3歳までの発症が圧倒的で，好発部位は，頭頂～後頭部である．硬膜損傷を生じるような線状骨折は，概して，当初より骨折線の幅が広い例が多い．症状は進行性で，けいれん，脳萎縮などの後遺症を伴うため，外科的手術が不可欠である．よつて，3歳以下の線状骨折においては，頭部単純写により，骨折が治癒するまで半年程度，経過を追う必要がある．本カンファレンスにおいては，自験例，4症例を呈示すると共に，その病態生理，症状，治療などを紹介した．

2．3ヵ月乳児巨大卵巣嚢胞の1例

（第2病院外科）

○川田　裕一・今泉　了彦・坪井　重雄

小児科領域では，卵巣嚢胞あるいは腫瘤性病変は比較的少なく，鑑別診断に苦慮することが多い．しかし，Benson によれば，卵巣嚢胞（Simple Cyst）は女児新生児期には，腹部腫瘤のうちで最も頻度の高いものであるという．われわれは最近この様な1例を経験したので，ここに報告する．

患児は3カ月女児で，周産期に母児共に特記すべき異常はなかつた．生後3カ月に，腹部膨隆を主訴として来院したが，すでに生後7日目頃よりこれに気付かれている．入院時理学検査にて，右季肋部より右腸骨窩へ及ぶ正中線を越える大きさの，波動を有する腫瘤を触知した．血液，尿等の検査はいずれも正常値を示した．注腸造影にて，結腸の左方および後方への著しい圧排を認めた．ＩＰでは腎および尿路系は正常であつた．エコー・グラムでは，典型的な Cystic Pattern を呈し，腹腔内を大きく占める単房性嚢胞と診断された．術前診断は卵巣嚢腫だが，大網嚢腫の可能性も大として開復した．手術所見は，左卵巣より発し，右腹腔内を占める卵巣嚢胞で，正常卵巣組織は圧迫により殆ど残つていない．左卵管の一部と左卵巣を含めて摘出した．摘出標本は 1,120 g あり，体重の約$^1/_5$を占める．組織学的には単純性嚢胞と診断した．術後9日完治退院した．

3．外傷外科と Microsurgery について

（形成外科）野崎　幹弘

近来増加する重篤な交通外傷や労働災害――これらは肢指の切断，広範な組織欠損等の難題をわれわれに与えた．しかるに，外傷外科および再建外科領域に，最近 Microsurgery が応用されるに至り，めざましい成績を挙げつつあるのが現況である．

われわれも，1973年以来，手術用顕微鏡を用い，直径 0.5㎜から 2.0㎜の微小血管吻合の実験練習を重ね，ウサギの耳介再接着の成功等，手技熟達をみた後，臨床面において切断指再接着や，遠隔皮弁の一次移植等に症例を重ねつつある．

今回，われわれは Microvascular Surgery および Microneurosurgery についてわれわれの臨床経験を合わせて述べると共に検討を加えた．

4．人工弁置換術の歴史と現況

（心研外科）北村　信夫

人工弁が初めて臨床に用いられたのは1954年で，Hufnagel のシリコン・ボール弁であつた．以来，色々